

# 世界を変えよう基金報告書

## 「合言葉はオッパニハー」

筑波大学医学群看護学類4年 中野 皐月

カンボジア首都プノンペンからバスで揺られること4時間、これから約1週間（3/18－3/24）過ごすことになるカンポット郊外の漁村に到着した。エアコン、冷蔵庫、水洗式トイレがある日本の生活とは懸け離れた場所であることは到着後すぐに気づいた。初日は、蚊帳と素朴な布団がある部屋で寝て1日が終了した。

翌朝、藁の間から差し込む光で目が覚まし、バンガローの外に出る。私の目の前に広がったのは美しい自然と水辺の上に立つ伝統的な家屋であった。村長からオリエンテーションを受け、マングローブについて理解を深める。「十分な設備の整った環境でなく申し訳ない。そして、我々の村に来てくれて、体力的作業となるマングローブ植林をありがとう。」と村長の言葉が私の心に響く。

早速、マングローブの植林作業が始まった。漁村から船に30分揺られ、マングローブの森に到着。整備されていない森をかき分け、木に登り、マングローブの種を採取する。次の日、マングローブを植えるための泥を作る。川の底から掘り起こした泥をカヌーで運び、ひとつずつ苗木をいれるためのパックを作っていく。「大きくなれよ。」と願いを込めながら一つずつ種を植えていった。この1週間で合計735本のマングローブの種を植えた。これらの種は約6ヶ月の間、村で育てられた後、広大な海へと戻す。私たちは、以前のボランティアの方が種として植えたすくすくと育った木を海に返す作業も行った。

次に、漁村コミュニティにおける橋作りを行った。以前に近くで使われていた建物を工具で壊し、木材を船を使用して村にもちこみ、再利用する。その木材を使って橋を建設した。言葉も通じない現地の人々から身振り手振りで工具の使い方を学ぶ。

言葉も通じない現地住民と私の合言葉は「オッパニハー」である。初めての作業ばかりで、私たちは、失敗が多い。しかし、そんな私たちにも現地の人々は常に笑顔と「オッパニハー（大丈夫だよ）」と声かけをしてくれた。この漁村には1年中世界からボランティアがやってきて、マングローブ植林や地域コミュニティの建築作業を行っている。彼らの人懐っこい性格が人々を魅了し、マンプログローブ植林プロジェクトやコミュニティ作りを継続的に行うことができているのであろう。作業の休み時間、私は村長の奥さんが営んでいる売店にクメール語の本を片手に毎日通った。彼女が今までのボランティアワーカーから学んだというたどたどしい英語を使いながら、クメール語をそして彼らの文化を私に教えてくれた。私はいつものように、売店に行き、本で会話をしようとした。どうしても発音に通じずに、クメール語の表記を見せた。しかし、彼女はクメール語を読むことができない。学校の行けなかったから、文字は読めないと彼女は言う。その衝撃と共に私は一気にこの漁村が直面している貧困という現実に戻された気分となった。

この村が、マングローブ植林を始めたのは4年前。漁村であるこの村では、魚の収益で人々が生活している。しかし、魚の収穫量が年々減少していた。そんなある日、NPO法人の代表がこの村を訪れ、「ここは景色もいい。観光地として最適だ。」と提案したという。それがすべての始まりである。観光地化とマングローブ植林プロジェクトが開始されたという。当初は、何もない更地であったが、世界中からボランティアが集まり共同のキッチン、シャワー、バンガローなどを設立しコミュニティとして機能するようになった。このコミュニティは地域住民の憩いの場となっており、学校が終わる夕方には地元の子供たちの憩いの場となる。川に面している子供たちは各々

にカヌーや魚釣りを楽しむ。そして週末には現地の子供たちに対して英語教育や環境保全教育が行われる。その横を、カナダやオーストラリア、EUから訪れた使節団が視察する。非常に不思議な光景である。

数年後、自分の植えたマングローブ林の成長を見届けに私は、この土地に戻りたいと強く願う。最後になりますが、今回、このような挑戦を行うために支援をくださった鈴木先生をはじめ、筑波大学渉外室の方々に感謝を申し上げます。ありがとうございました。